

健康

質問

45歳で卵巣がんになりました。がんが転移し、おなかに広がっているようで、今後の治療がとても不安です。

卵巣がんがおなかに転移



西村 正人
徳島大学病院がん診療
連携センター長

回答 卵巣がんは症状が出にくいため、気づいた時はおなかに広がっているケースがよくあります。こんな場合でも、手術と化学療法を組み合わせた治療で、完治の可能性は十分あります。

病巣が摘出可能な場合には手術から治療を開始します。それでも完全摘出が難しい時は化学療法から治療を始めます。4、5回化学療法を行った後、残った腫瘍を手術で摘出します。

手術で完全摘出できれば最初に手術しても化学療法後に手術しても、治療効果にあまり差はありません。化学療法を8、9回程度行い、病巣が消滅したら治療終了です。

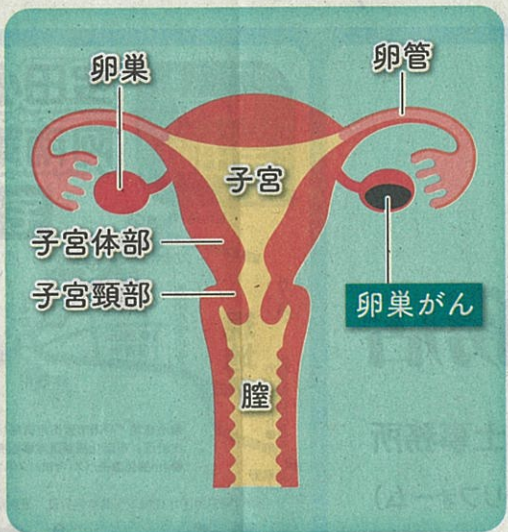
この段階で治っているようでも半数以上で再発します。このことから卵巣がんの治療は再発を起

手術と化学療法で治療



こさないことが重要です。

進行卵巣がんの再発予防にPARP阻害薬が新しく使えるようになりました。遺伝子の傷を修復する機能が低下しているがん細胞にPARP阻害薬を投与すると、がん細胞が死滅しやすくなります。進行卵巣がんの半数はPARP阻害薬が有効



再発予防へ維持療法も

がん何でもクイズ

自身の経験を生かし、がん患者の相談支援に携わるがん経験者を呼ぶでしょう。①ピアサポーター②ピアリーダー③ピアアンバサダー

行こうよ！がん検診

です。PARP阻害薬が有効と判断した場合は2、3年間、薬を内服します。PARP阻害薬が適応しない場合は血管新生阻害薬を用いた維持療法を行います。PARP阻害薬と血管新生阻害薬

を組み合わせた治療もあります。

治療の適正は手術で摘出した標本を検査して判断します。新しい治療であり、この維持療法が重要です。

45歳での卵巣がん発症は、遺伝性乳がん卵巣がん症候群(HBOC)の可能性が心配です。乳がん、卵巣がんが若年で多発する疾患で、遺伝子BRCA1またはBRCA2の異常が原因と分かっています。

卵巣がんの診断を受けた場合はHBOCかどうかを血液検査で調べることができます。BRCA遺伝子に異常がある場合は血縁者に50%の確率で伝わるので要注意。希望すれば家族の検査も可能です。BRCAに異常がある場合、化学療法やその後の維持療法の高い効果が分かっています。卵巣がんの治療に併せて今後発生の可能性が高い乳がんの検診をより精密に行う必要があります。

(第4土曜掲載)

がんに関する質問は
徳島がん対策センター
電話 088 (634) 6442



(平日午前
8時半から
午後5時
まで)へ。